

教職大学院 Newsletter No. 108

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008. 4

2018.2.16

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2018 Spring Sessions 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2018
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
spring sessions 2018

2/16(fri) 17:30-18:40
17(sat) 11:30-17:40
18(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V(教育系1号館) 総合研究棟

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究
学校と大学/実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2018.2.16-18

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻
共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム
後援 福井県教育委員会・福井県光コンベンションビューロー

内容

ラウンドテーブルによるこそ (2)

実践し省察するコミュニティ 実践研究福井
ラウンドテーブル 全体スケジュール (3)

Pre-session	(4)
ZoneA 学校	(4)
ZoneB 教師	(6)
ZoneC コミュニティ	(8)
ZoneD 授業	(9)

Round Table Cross Sessions (10)

省察的実践学会 発足に向けた第3回準備会 (10)

Students' Poster Session (11)

実践し省察するコミュニティを結び支える	(12)
ラウンドテーブルの歩み	(14)
ラウンドテーブルの広がり と 深化	(16)

アーカイブ (17)

基金のお知らせ (24)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2018年2月の開催をもって34回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。初日のプレセッション、学校（Zone A）・教師（Zone B）・コミュニティ（Zone C）・授業（Zone D）の各領域に分かれた2日目の各ゾーンのセッションを経て、最終日はクロスセッションでの語り合い・聴き合いを行います。この3日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

ラウンドテーブルによるこそ

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 柳澤 昌一

実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions に参加いただき、ありがとうございます。

17年の年、34回の積み重ねの中でつねに展開し続けているラウンドテーブルですが、大切にしていること、願っていることは変わりません。実践の長い歩み、そのプロセスをじっくり語り、聴き合い、互いに問い深める時間と空間を生み出したいということです。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

それぞれの分野では、固有の技術や言葉や型を彫琢していますが、実践のプロセス、それを通した実践者としての学習と成長の道筋に関心をもって聞けば、そこには分野を超えて共有できる、されるべき実践の中での知とその成長のストーリーが紡がれていることに気がきます。そして、そこで捉え返され共有される長い実践展開のストーリーが、次の自他の実践の展開を支えるフレームとして生きて働いていくことを実感してきています。その時ラウンドテーブルは、一過性の集会ではなく、それぞれの実践のコミュニティでの営みとその意味を問い返し、その持続と発展を支える省察的なコミュニケーションのためのメタコミュニティとして働き続けていることになります。

こうした省察的なコミュニケーションとそのコミュニティを通して、地域を越え分野を超え、しかもそれぞれの分野の実践の長い展開に根ざした協働探究の可能性がひらかれるならば、それぞれの実践の蓄積と多様性を活かしたパブリックなコミュニケーションを編んでいく可能性につながっていくのではないか。それは公教育(Public Learning)とその理念への問いと、それぞれの持ち場での日々の実践との見失われた環を問い直す、編み直すプロセスにもつながっています。その問いは、教育学部・教職大学院の存在する根本的な理由に根ざしています。

プレセッションから多様なサイクルの積み重ねを通して、互いの実践の展開を跡づけ、意味を共有し、次の展開へと視界をひらいていく3日間にできたらと思います。

語り手以上に聴き手の力が問われるラウンドテーブルです。今回もまたセッションを通してプロセスを追う力を培っていきたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。

実践研究

福井ラウンドテーブル

spring sessions 2018

2/16(fri)

Pre-session 17:30-18:40

専門職学習コミュニティを培う
ラウンドテーブルの意味

2/17(sat) 11:30-17:40

Students' Poster Session 11:30-14:30 子どもたちが語る「私たちの学校・学び・未来」

orientation 13:00-13:10

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校:子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ
ー実践の継承と新学習指導要領を踏まえたこれからの学校づくりー
- B 教師①有識者会議の報告を受け教師教育はどこに向かうのか:教科の専門性と教員研修の明日を問う
②これからの教員養成を学部・大学院を通して考えるー実践を聴き、夢を語るー
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
ーつながりの編み直しを支えるー
- D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究ー保育研究をいかに組織するかー
with international sessions

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 16:00-17:40 テーマ別話し合い 問いを深める forums

18:00-18:40 省察的実践学会準備会

2/18(sun) 8:20-14:00

Session IV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●2/18の session IV の参加についてのお願い＝午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。

そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。

原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

2/16 (fri) 17:30-18:40 会場：教育系1号館 6階コラボレーションホール

Pre-session 専門職学習コミュニティを培う

ラウンドテーブルの意味

2/17 (sat) 13:00-17:40

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

実践の継承と新学習指導要領を踏まえたこれからの学校づくり

会場：教育系1号館 2階 大1講義室 / 1階 11, 12 講義室

今回の学習指導要領の改訂では、これからの社会を生きる子どもたちが必要な資質や能力を身に付けることができる教育課程の実現のため、主体的・対話的で深い学びを通した「生きる力」の育成や、学校を有機的な組織として機能させていくカリキュラム・マネジメントの確立が強調されています。これから子どもたちは、高度に情報化し、少子高齢化が進み、グローバル化も一層拡大する社会を生きることになります。ですから、学校教育に携わる私たちが、この新たな方向性をしっかりと見据えていく必要があります。しかし、正直なことを言えば、これまで慣れ親しんできた学習指導要領からの変化を手放しで歓迎できない気持ちも、一方であるのではないのでしょうか。私たちが誰も経験したことのない社会を生きる子どもたちをどのように支えていけば良いのか、答えの出ない課題に雲をつかむような思いを持つというのも、偽らざる気持ちでしょう。

一方、新学習指導要領で謳われている方向性は、私たちにとって決してなじみがないものではありません。子どもたちに必要な力を考えること、主体性や関わりを重視して日々の授業を作り上げること、そして学校を組織として捉えていくことは、むしろこれまでも私たちが（明確に、あるいは暗黙のうちに）大事にしてきたことではないのでしょうか。そういう意味では、新たな学習指導要領は、これまで私たちが取り組んできたことの延長線上にあるものと言えるように思えます。

こう考えたときに重要になってくるのは、新学習指導要領に沿って実践をどう変えていくかではありません。むしろ、新学習指導要領に沿いながら、これまで培ってきた実践をどのように継承していくのか、この点にあるように思います。この「継承」というキーワードは、これまでZone Aが掲げてきた「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマに深く通じます。学校における実践の継承は、個人から個人へ伝達されるものというより、教師のコミュニティの中で行われることだからです。このように考えるならば、

教師のコミュニティにおける実践の継承は、子どもたちを支える学校づくりの核であるとも言えるはずです。

そこで今回Zone Aでは、「実践の継承と新学習指導要領を踏まえたこれからの学校づくり」というサブタイトルを掲げることにしました。ポスターセッションでは、このテーマに基づいた様々な取り組みを、ポスターを通して発表いただきます。続くシンポジウムでは、新学習指導要領で謳われるような取組を長年にわたって展開してきた学校の先生方をお呼びし、実践、研究、そして継承についてお聞きします。さらに、最後のフォーラムでは、参加者の皆さんはどのように考えるのか、それぞれのお立場から語り合う時間を持ちたいと考えております。この3つのセッションを通し、これからの学校教育における教師コミュニティの可能性について、皆さんと深め合うことができればと考えております。

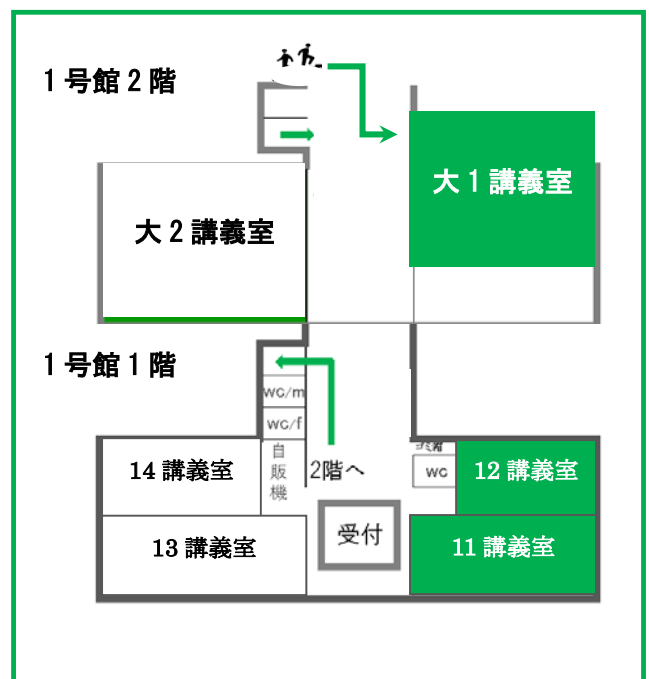
Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	＜教育系 1 号館 2 階	大 1 講義室＞
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレッジフェア)	＜教育系 1 号館	1・2 階 フロア＞
Session II	14:20-15:50	シンポジウム	＜教育系 1 号館 2 階	大 1 講義室＞

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

：実践の継承と新学習指導要領を踏まえたこれからの学校づくり

＜シンポジスト＞	奈良女子大学附属小学校	阪本一英	教諭・西田淳	教諭
	信州大学附属松本中学校	矢島裕文	教諭	
＜コメンテーター＞	福井大学附属義務教育学校後期課程	牧田秀昭	副校長	

Session III	16:00-17:40	フォーラム	＜1 号館 1 階	11, 12 講義室＞
--------------------	-------------	-------	-----------	-------------



Zone B 教師

21世紀の教師教育をイノベーションする

B1 有識者会議の報告を受け教師教育はどこに向かうのか

:教科の専門性と教員研修の明日を問う

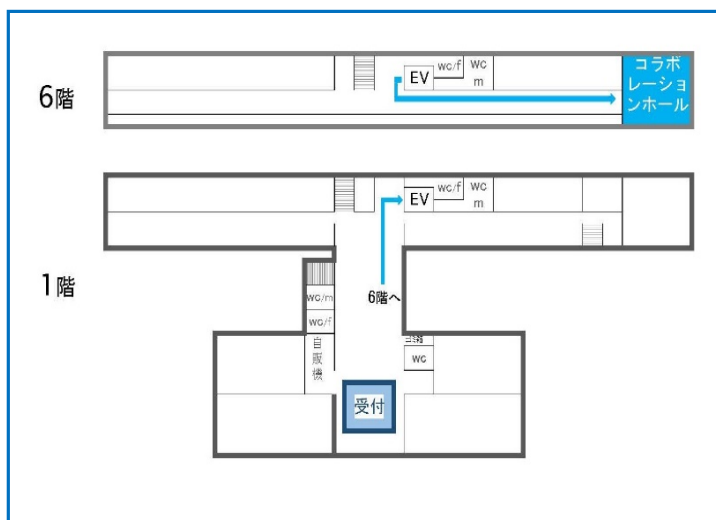
会場：教育系1号館 6階コラボレーションホール

Zone B では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、“21世紀の教師教育をイノベーションする”をテーマとしています。

現在、教育界は、戦後の教育改革に次ぐ、いやそれを凌ぐかもしれない教師教育改革の真ただ中にあります。

国立教員養成大学・学部・大学院・附属学校の改革に関する有識者会議報告（H29.8.29）は、その岐路を示すものではないでしょうか。教師教育の変貌と衰退、どちらの一步になるのか。十分な議論がなされた上で決断した場合には、各大学が一挙に動く決意が必要であると思われます。

このシンポジウムでは、有識者会議の主旨として報告をまとめられた 加治佐哲也氏（国立高等専門学校機構監事・前兵庫教育大学学長）からは具
体の政策としてどのようなことが考えられるか、
出口利定氏（日本教育大学協会長・東京学芸大学学長）からは報告における乗り越えなければならない課題について、常盤豊氏（文科省生涯学習政策局長）からは生涯学習の視点で見た教師教育について論じていただき、参加者の皆様方と明日の教師教育の展望を開きたいと考えております。



Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	<教育系1号館 6階 コラボレーションホール>
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレッジフェア)	<教育系1号館 1・2階フロア>
Session II	14:20-17:40	シンポジウム	<教育系1号館 6階 コラボレーションホール>

<シンポジスト>	国立高等専門学校機構監事・前兵庫教育大学学長	加治佐 哲也 氏
	日本教育大学協会長・東京学芸大学学長	出口 利定 氏
	文科省生涯学習政策局長	常盤 豊 氏
<コーディネーター>	福井大学教職大学院教授	松木 健一 氏

B2 これからの教員養成を学部・大学院を通して考える

:実践を聴き、夢を語る

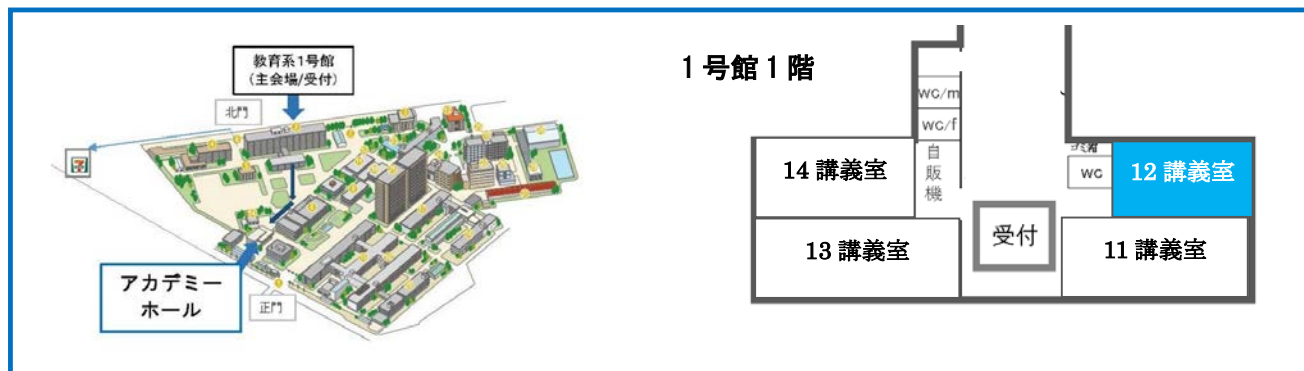
会場：教育系1号館 1階12講義室 / アカデミーホール

教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ、とりわけ教職免許法の改正にともなうカリキュラムの改変が求められてきています。しかし、長い蓄積のなかで培われてきた組織の中で、新しい課題への取り組みを進めていくことには大きな困難がともないます。それぞれの実践や経験を活かした、当事者としての知恵が問われてきていると思います。

今年6月に開催されましたラウンドテーブルの【Zone B2】では、学部の教員養成に携わる当事者である教員によるセッション B2 (a)「これからの学部段階の教員養成を考える 実践を聴き、夢を語る」と、その教員養成課程に身をおく学部学生によるセッション B2 (b)「学部学生のクロスセッション 授業/活動-語ろう・聴こう・出会い直そう-」が開催され、各セッションにおいて、互いの取り組みを聴き合い、語り合うセッションが行なわれました。そこでは、教員のみならず、教員養成課程における学びの主体者である学部学生の視点からも「教職への夢を語る教員養成」を展開していくための多くのヒントが出されました。ただ、教員と学生間でのセッションを超えての議論には十分に発展せず、互いにこれからの教員養成について、どのような考えをもっているのか、どのようなカリキュラム、学びや経験を期待しているのかなど、新たな「問い」が生まれてきました。さらに、今後福井大学での喫緊の課題でもある、学部と教職大学院の接続は、日本の教員養成の共通課題であり、そこで、学部段階における教員養成は、教職大学院への接続も想定しながら、その在り方を考えることが求められています。教職大学院では実践をベースとして、学校での長期のインターンシップを通して学校の総体を学び、現職院生とともに日々の実践を語り合い、省察することが学びの中心に据えられています。そうであるならば、その前段階である学部における教員養成が担う役割は何なのか？この「問い」は、今日教職大学院が全国的に拡がりを見せるなかで、全国の教育学部に共通する課題であるといえます。

そこで、今回は、これまでの【Zone B2】での経験を踏まえ、前回同様、少人数で多様なメンバーが大学を超えて教員養成の取り組みを語り合う場を設けたいと思います。またそれに加え、今回は、今後学部を卒業して教職につく学生と教職大学院に進学してさらに学びを深める学生双方の学部・大学院段階での学びや教員養成の取り組みをどのように支えていくのかについて考えていきたいと思います。それぞれの取り組み、そこでの工夫、あるいは課題や悩みも含めて共有し、学び合いながら、教員と学生の垣根を超えてこれからの学部・大学院における教員養成への夢を当事者として語り合えればと思います。多くの教員、学生、院生の参加をお待ちしています。

Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	<教育系1号館1階 11 講義室>
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレッジフェア)	<教育系1号館 1・2 階フロア>
Session II・III	14:20-17:40	グループセッション	<教育系1号館2階 アカデミーホール>
① 話題提供 武蔵野美術大学からの実践報告 (30 分), 休憩			
② ①を受けた教員と学生のセッション (90 分), 休憩			
③ ②を受けた教員と学生を分けた別グループでのセッション (60 分)			



Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

つながりの編み直しを支える

会場：教育系1号館 1階 13講義室 / 共用講義棟 (K420 K320 K310)

現在、急速な科学技術の高度化やグローバル化、少子高齢化が進む状況のなか、地域が直面する課題も複雑なものへと変化し続けています。言うまでもなく、地域とは共同かつ長い時間をかけ歴史的・社会的に構築されてきたものです。この大きな変化の時代において、今後地域が萎縮・融解へと向かうのか、あるいは発展・保全へと向かうのか、現在私達はその岐路に立っていると言えます。Zone C では後者を展望し、長い時間の見積もりを持った地道な実践の積み重ね、歩み、そしてその展開を地域・世代・領域を超え検討し、更にここ数年はコミュニティの発展における「持続性」に焦点を当て、互いの実践から学び合っています。

前回および前々回では、コミュニティの持続的な発展を支えているものとは何かといった初発の問いに立ち返り、コミュニティのコミュニケーション構造や組織化について検討を重ねてきました。前回までの検討を踏まえ今回は「つながりの編み直しを支える」コーディネートの可能性およびコーディネーターの力量形成に焦点を当てていきます。社会教育の文脈においては現在「社会教育主事養成制度」の見直しが行われており、平成32年度に新制度の施行が予定されています。また、学校教育の文脈においては「学校と地域の連携・協働」のあり方と今後の推進方策が中央教育審議会答申にて提起されています。多くの地域コーディネーター、学校関係者、地域・教育活動に取り組んでいる学生さん、そしてあらゆる世代・領域の方々の参加をお待ちしています。

Orientation	13:00-13:10	ガイダンス	＜教育系1号館 1階 13講義室＞
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション(ナレッジフェア)	＜教育系1号館 1・2階フロア＞
Session II	14:20-15:50	シンポジウム	＜共用講義棟 K420＞

〈シンポジスト〉 京都市役所 京都市まちづくりアドバイザー 谷 亮治 氏
 福井市中央公民館主事 田村 栄子 氏
 〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院 富永 良史 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム ＜共用講義棟 K420 / K320 / K310＞

Session II シンポジウムでの話題提供を受け、小グループで実践の交流を行います



Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

会場：教育系1号館 2階 大2講義室 / 1階13, 14講義室・2階203講義室

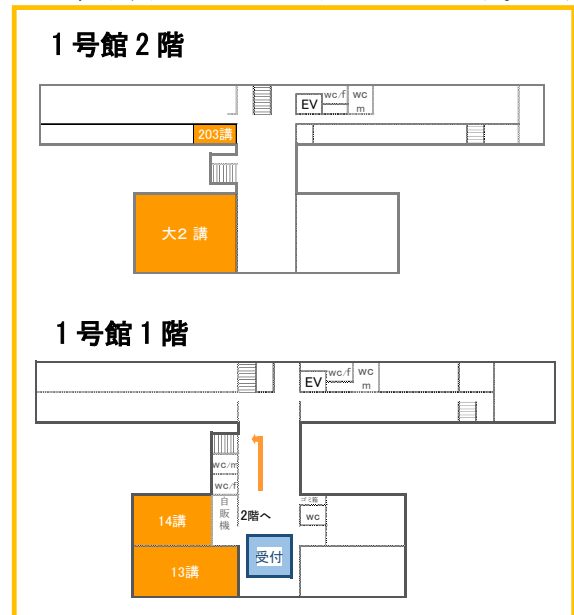
いま、子どもたち自身が主体的に課題に向き合い、さまざまに対話を重ねながら探究し、学びを深めていく学習の在り方が求められています。そのためには、私たち自身の学習観を問い直し、専門職として協働して学び合いながら、授業や保育の質を高めていく授業研究・保育研究が重要となります。こうした背景のもと、ZoneDではこれまで、子どもと教師の学びを支えるための授業研究・保育研究について考えてきました。

一方で、こうした改革は日本に限定されたものではなく、世界的な動向とリンクしたものでもあります。たとえばOECDではこれからの時代に必要となる新たなキー・コンピテンシーが検討されつつあります。また日本で行われてきた授業研究は「レッスン・スタディ」として知られ、各国でさまざまに行われています。日本の授業研究もまた、より良い形の模索が続いています。

そこで今回は、これからの授業研究・保育研究をいかに組織するのか、各国の現状を踏まえて、どう深化させていくことができるのか、考えていきたいと思います。

「シンポジウム」では、フィリピン、マラウイ、日本から、教育にかかわる先生方に登壇いただき、それぞれの国の現状の中で、子どもや教師の学びを支える授業研究・保育研究をどのように進めつつあり、どう深化させていこうとしているのか、話題提供いただき、議論を行っていきます。

シンポジウムでの問題提起を踏まえて「フォーラム」では、参加者がそれぞれの現場で何ができるかを考えていくために、大まかに校種や領域で部屋を分かれます。それぞれの分科会で話題提供者から具体的な実践を簡単に紹介いただいた上で、小グループで話し合い、深めていきたいと思います。



Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

<教育系1号館2階 大2講義室>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア)

<教育系1号館 1・2階フロア>

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

<1号館2階 大2講義室>

「子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

～各国の現状を踏まえて、どう深化させていくか～」

<シンポジスト>	フィリピン大学国立理数教育開発研究所	ウレップ・ソレダドウ 氏
	マラウイ カトト中等教育学校長	クリストファー・ニャスル 氏
<コメンテーター>	福井県立若狭高校	小坂 康之 教諭
	福井大学教職大学院	高阪 将人 講師

Session III 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館1階13・14講義室 教育系1号館2階203講義室>

Session IIでの話題提供と校種別の実践報告を受け、小グループで実践の交流を行います。

A. 「保幼小の実践に学び合う」	滋賀県愛荘町立秦荘幼稚園 今居 静香教諭・矢守 大智教諭
B. 「中学校の授業研究の展開をマネジメントする」	長野県伊那市立伊那小学校 宮川 達也教諭
	信州大学附属松本中学校 北原 遼司教諭
	福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程 木下 慶之教諭
C. 「特別支援教育の実践に学び合う」	福井県立嶺南東特別支援学校教諭 河端 稔教諭

18:00-18:40

会場：教育系1号館6階 コラボレーションホール

省察的实践学会 発足に向けた第3 回準備会

個々のコミュニティ・分野・領域を超え、実践の知を通わせ、結んでいく。そのための新しい実践研究の交流の場を拓く。そうした新しいコミュニケーションの場を目指して、2016年6月に〈省察的实践学会〉の呼びかけをはじめ、以来、多くの方に賛同いただき、さまざまなコミュニティ・分野・領域から発起人・会員が集まりつつあります。2017年2月・6月のラウンドテーブルにおいて準備会を行い、学会の趣旨を共有しました。今回、正式な発足に向けて意見交換をするセッションを持ちたいと思います。関心をお持ちの方はぜひご参加ください。

2/18

(sun) 8:20-14:00

Session IV 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

8:20 1号館1階ロビーで受付をお願いいたします。参加するグループを確認してください。（グループは、多様なメンバーが交流できるよう、運営委員会で設定いたします。）

- | | |
|--------|-------------|
| ① はじめに | 8:30-8:40 |
| ② 自己紹介 | 8:40-9:00 |
| ③ 報告Ⅰ | 9:00-10:40 |
| ④ 報告Ⅱ | 10:40-11:40 |
| ⑤ 報告Ⅲ | 12:20-14:00 |

ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。

報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。

Students' Poster Session

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来へのイノベーション』

実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Spring Sessions、2月17日（土）Students' Poster Session「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来へのイノベーション』」のご案内です。これから、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生・高校生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

2月17日（土）11:30-14:30

会場：教育系1号館2階 大1講義室・大2講義室 / 教育系1号館2階 コミュニティプラザ

Students' Poster Session 11:30-12:30
 学びde交流 タイム 13:30-14:30

<大1・2講義室>
 <コミュニティプラザ>

小学生「きずなをつくる」
 中学生「夢 語ろう会」
 高校生「イノベーション 語ろう会」



ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実は動かしがたい。そうし

た暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

(柳沢 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 ,2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I II→省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2017.6

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働（第 1 回）
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者 20 数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第 3 回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第 4 回）
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第 5 回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第 6 回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル 2004（第 7 回）
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 8 回 参加者 100 名超）
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 9 回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ（第 10 回）
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006（第 11 回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 12 回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 13 回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 14 回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 15 回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 16 回）稲垣忠彦
- 2009.6.27.28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 17 回）5 つの領域：専門職として学び合うコミュニティ
（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 18 回参加者 300 名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 19 回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護

2011.2.26-27	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える) 門脇厚司・森透
2011.6.25-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 21 回) 松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
2012.3.3-4	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回) (名称を変更する)
2012.6.23-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第 23 回) 参加者 450 名を超える 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2013.3.2-3	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第 25 回) 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions (明治大学) 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
2014.3.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回) 参加者 550 名を超える
2014.6.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第 27 回) 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学) 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学) 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム, 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
2015.2.27-3.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 28 回) 参加者 700 名を超える
2015.6.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第 29 回) 11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学) 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学) 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル, 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム, 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2016.2.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第 30 回) 参加者 800 名を超える 生徒ポスターセッションを開催
2016.6.24-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第 31 回) 参加者総数 547 名 7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル) 11.12 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学) 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学) 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
2017.2.17-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第 32 回) 参加者 800 名を超える 特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
2017.6.23-25	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第 33 回) 参加者総数 566 名 10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園), 10.15-21 マラウイラウンドテーブル, 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)

分散型コミュニティへの挑戦 ラウンドテーブルの広がりと深化



2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力量形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年間もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このたゆまぬ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保証するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数のコミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこ

でコミュニティ間の相互作用が加速化すると何が起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解（ソリューション）」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指をくわえて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」で結びつきを強めたいいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考案し、共有可能な「知」を蓄積することが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がりや各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」へと深化・進化することだろう。

（木村 優『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がりや深化』2015.3.31）

Archive —アーカイブ—

ラウンドテーブル 2012 Spring Sessions と 2015 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.41 (12.04.07) と No.71 (15.04.04) からご紹介いたします。

Newsletter No.41 (12.04.07) より

協働探究の展開を語る・プロセスを聞き取る

富山市立堀川小学校

滝澤 亨

自分の実践を含めた 3 つの実践についての話合いから学び、再確認したのは、立場や環境が違って共通したことがあるということです。それは、「切実な問題こそ成長や発展のきっかけとなること」、そして「問題の解決には他とのかかわりが欠かせないこと」です。

私が参加したテーブルでは次のような実践報告がありました。

1 つ目は、地域住民が一体となれるように取り組んでいる夏祭りの事業について、公民館主事の方の報告です。地元で古くから暮らしている人たちと新興住宅地に暮らす人たちとの間に、考え方の違いがあり、自治会への加入率も低い地域の中で、夏祭りが 17 回も続いています。しかし、実行委員からも事業の廃止論が出る中、部会での会議を頻繁に行い、今後について話し合う検討委員会を立ち上げていきました。それは、祭りの目的を明確にするなど、問題意識をもって語り合う場を設け、住民の意識の変化を促そうとしているものですが、まさにコミュニケーションの場が、コミュニティの土台を確かなものにしていました。また、公民館主事の立場が、住民同士のかかわりを深めるために有効に働いていると思いました。

2 つ目の実践は、不適応状態になった中学校教諭自身の経験から、その要因と教訓についての報告です。長く教員としての経験の積み重ねの中で、どうして不適応状態に陥ったのかについて、これまでの勤務校でのくらしや自身のくらしぶりを細かく振り返られていました。さらに、現在の勤務校で不適応状態になったときの状況や、その前後の周囲の人々とのかかわりから、自分自身をみつめることによって、自らの力で改善の方途を見いだしているものでした。

新たな環境の中で、これまでの経験を生かしながら自分を更新させていくには、身の周りにいる人々とのかかわりを絶やさないことが大切であるということ学びました。

最後に、仲間の姿をきっかけにして自分の思いを打ち明けていく子どもについて、私の実践からの報告でした。子どもは壁にぶつかったとき、仲間がいるからこそ、やればできると思ってがんばることができます。しかし、それは子どもに限ったことではなく、教師自身も含めて、誰でも同じではないかと強く感じさせられました。

このラウンドテーブルで貴重な学びを得ることができました。「きっかけ」と「かかわり」を大切に、これからも子どもと向き合い、研鑽を積んでいきたいと意を新たにしているところです。

教師も学びあい育ちあう学校づくり

茅ヶ崎市立浜之郷小学校 高橋 みずほ

「どうすれば継続できる？」本校の研修について話をきいてくださった皆さんから繰り返し出された

質問です。その度に私は戸惑い、「“継続”が目的ではありません」としかお答えできませんでした。

その質問の真意は何だったのか、今改めて問い直しています。「すべての子どもの学びの保障」のために「授業研究を研修の中軸に据えた」学校である浜之郷小学校。授業研究とは、授業をひらき、個々の子どもの活動をつぶさに観察し、省察し、授業をつくることです。それが本校の教師たちには「当たり前」です。ポスターセッションでの各校の取り組みを伺っていると、「理解してくれる職員が少ない」「校内研修を一から立ち上げる大変さ」と体制づくりからの困難を語っておられました。「当たり前である幸せ」を感じました。浜之郷が14年間変わらずに教室をひらき続けられていることにお答えできなくても、「秘密」は探る責任があると感じました。

リアクションが大きかった「若い教師が育つ」こと、そこに糸口を探ろうと振り返ってみても、やっぱり特別なことは何一つしていないのです。ただ、その人自身が考え、気づく瞬間まで『待つ』ということ。教えたいのなら言葉で諭すのではなく、自分

の活動で見せるということ。その何気ないことを誰に強制されるでもなく、私がしてもらったから次の人にする、と続いていきます。『継続』の秘訣は「自分がしてもらってよかった」という単純な心地よさ・よい経験の広がりなのかもしれません。

子どもとともに教師も育ちあう学校で、これからもあり続けたいと思います。



協働学習のスタートとしてのポスター発表

養成教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校インターンシップ 佐々木 庸介

私たち教職大学院ストレートマスター2年生は、実践を行う傍ら「公教育における教科の意義」を考察してきました。この度のランドテーブルで考察してきた過程を発表する機会をいただき、発表に向けて報告書、そして発表ポスターを製作しました。ここではこの準備の過程と発表、そして発表後の省察において学んだことを書きたいと思います。

「公教育における教科の意義」を探究するようになったのは、大学院の実践的な授業がきっかけでした。学校教育という公教育の一部を担う教諭が、「なぜ公教育を行うのか。そして教科は公教育において何を担うのか」を考え続けることはライフワークとして行っていくことが必要だと考えたからです。3ヶ月間の意義を考察する授業では、授業実践を行うために使用してきた学習指導要領の他に、カントやコンドルセ、福澤諭吉が記した、公共性や公教育をめぐるテキストを読みました。子どもに向き合い実践を行うことを中心として行ってきた院生にとって、教育の根本を探るという経験ができました。そして公教育の意義は「より民主的な協働社会の形成を目指すために、協働学習の場を提供すること」ではないかと考えるようになりました。しかし、この段階では教科の意義について考察することができ

ておらず、授業実践と公教育の意義を結びつけることができていませんでした。

そこで授業終了後、公教育の意義を基に教科の意義を考えていくことにしました。夜に院生室に集合し、何度も意見交換を繰り返しながら教科の意義に迫っていきました。院生は国語、英語、理科、社会、保健体育、特別支援教育と専門が異なりますが、全員でこれらの分野すべての意義を考察していきました。すると次第に各教科の共通点や特性が明らかになりました。

そしてこれらを自己の実践と照らし合わせ、省察して今後の課題を考えました。ランドテーブルでは考察したことと過程をポスター発表すると同時に、報告書を作り配布しました。発表では多くの方に発表を聴いていただくと共に、「実際に実践ではどのような課題を提示するのか」といったような具体的な質問なども頂き、さらに新たな課題が生まれました。

私たちは、この過程を通して自らが行ってきた授業実践を省察する新たな視点を得ることができました。以前の私たちは公教育の意義を「豊かに生きていくことができる人を育てること」が目的なのではないかと考えてきましたが、学習を通して「社会契約の主体として人々が学び合う場を形成し互いの学習を支える」ことが目的だと考えるようになりました。

た。これによって「教材研究の意義」「探究することの意義」「子どもをみとることの意義」が大きく変わりました。

また、私たちはポスター発表という形で自らの考えを他者に伝えるために、院生一人ひとりが省察し、概念を再構成して、言葉を吟味しながら言語化するという協働学習を行いました。終了後の振り返りでは、「この過程に学びの深まりを感じ、共に学び合うことの意義を感じた」と院生全員が省察しています。よって今回の公教育における教科の意義を考察して発表した過程が、私たちにとって「ライフワークとして『公教育における教科の意義』や『授業観・生

徒観・指導観』を協働探究し続けるためのスタート」であったと価値づけています。



Newsletter No.71 (15.04.04) より

「聴く」という実践

そうそうカフェ 大竹幸浩

ZoneC では「＜女性たちの声を聴く＞実践の可能性」と題したシンポジウムがあった。

私は小グループでの対話を通じて「死生を学びあう場」を培う実践に取り組んでいる。その中で「聴くという行為は難しい」と感じてきたことから、このシンポジウムで「聴く」ことについてどのような可能性が示されるのか興味を引かれて参加した。

久島幸江さん（越前市味真野公民館）は、「住民の声を、『上手に』ではなく『一所懸命に』聞き取ろうという態度で臨んだ」と語っていた。

私の場合、人の語りを「聴く」とき、それが自分の価値観と相容れなかったり、攻撃的な口調であったりして、自分には合わないと感じてしまうと、耳をふさいでしまいたくなることがある。

しかし、そのような語りであっても、久島さんと共通するかもしれないのだが、語り手に向けて「一所懸命に」じっと耳をそばだてているうちに、あたかも地中で鉱脈を見つけたかのように、あるいは、難解そうな現代アートの意味を私なりに感じ取ることができたときのように、その語り独自の文脈が脳裏に浮かび上がってくることもある。そうになると、むしろ、その語りを「聴く」ことがおもしろくなり、その語りの意味をもっと探してみたいと思ったりする。

いつもそうだということではないのだが、というよりも、稀にそういうことがあるというべきなのだが、おそらく、私はそのように「聴く」過程で、自分の思考の枠組みや語り手に対する思い込みをいっ

たん外しているのだろう。そうして、語りに対して予断を持つ誘惑から自分を解放できたとき、スッとその人の語りが自分の中に入ってくることがあるようだ。

一方、そういうとき、語り手はどのような様子かという、「気持ち」が穏やかになっているのではないか」と感じるものがたびたびである。

遠藤恵さん（NPO 法人市民メディア・イコール）らが、福島県内で 3.11 を経験し、今も福島に住んでいる 30 人の女性の体験を聞き取ったときに、インタビューから「話してよかった」「気持ちが楽になった」といった感想が示されたとの報告があった。



このケースでは、聴き手が全員女性であり、被災当時者であり、「聴く」ことについて鍛錬してきた方々であったからこそ、こうした感想が寄せられたのだろう。それにしても、ここに、「聴く」という実

践が「語り - 聴く」場にもたらす作用の一端が示されていると思った。

「聴く」という実践は、語り手と聴き手の双方に、少なくとも上記のような益を生じさせ得るし、その相乗効果によって、穏やかで豊かな場を形成し得る。

これは、自分の価値観と相反する内容の発言や、差別的な発言などに対する、暴力を頂点とする過剰に対抗的な対応とは対極にある、平和的な実践のあ

り方と言える。もちろんそのような発言を「聴く」ためには、「聴く」ことについてのすさまじい研鑽が求められると思うが。

2人の報告者から、困難な課題を抱えている状況の中での、「聴く」ことを軸とした実践の報告を聴いて、それらの実践には、静かに場の状況を変革してゆく可能性があることを学んだ。

教師は「楽しい」専門職である

教職専門性開発コース2年／福井市至民中学校 高田侑来

2月22日、福井県に春一番が吹いたとの発表があった。昨年より18日早かったそうだ。それから約1週間後の2月28日、福井大学のキャンパスにもそれは吹いた。しかしあの場に吹いた爽やかな風は、季節を感じるだけのものではなかったはずだ。人それぞれ感じ方は違うが、どこか「新鮮」で、かつ「学び」のある、そして何よりワクワクする「楽しさ」がある刺激的なものだったのではないか。少なくとも私はそう感じた。

2日間に渡って行われたラウンドテーブル。私はたくさんの方の言葉、実践、考え方、そして人と出会った。その中で特に印象に残った1日目のシンポジウムの内容を中心に報告させていただく。

私はZone A「学校」のセッションに参加した。テーマは「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」。その中で今回は「子どものこと、学校の事を語り合える組織づくり」に焦点をあて、午後に行われたシンポジウムでは校種が違う三名の先生の実践に耳を傾けた。長野県中野市立中野小学校の武居先生・金沢大学附属高等学校の風間先生、そして私のインターンシップ先でもある福井市至民中学校、鈴木先生の報告である。先生方が学校運営の中心としてどのような実践研究会を企画し運営しているか、その工夫を中心にお話いただいた。共通していると感じたのは以下2点。まず職員が自分自身の気持ちや経験を語る場を設けること、そして研究内容に仲間（同僚）の希望や悩み、つまり本音を聞き入れ盛り込むことである。

まず、これを読む教員の皆さんは自校の研究会にどのような心意気で参加されているだろうか。想像するにその気持ちは決して明るい、前向きな気持ちとは言えないと思う。その理由は、つまらない、面倒というマイナスなイメージが付きまとうからだ

予想される。これを改善する一つの方策が、教員が自分自身のことを飾らず「語る」という行為、そしてそれが出来る場を設けることであることを今回知ることができた。私が思うに教員は、日々の業務に追われ公式な場で悩み等自分の胸の内を吐露する機会はほとんどない気がする。もしあっても雑談がてら仲の良い同僚と話すのがやっとだろう。そこで、研究会内で授業の事、生徒指導の事、その他悩んでいる事を学校が抱える課題にそって自由に語る機会を設けることで、教員同士の絆が徐々に深まってくる。またこの気軽に、自由に、というのがポイントで、フランクに話す事で業務感がなくなり、より充実感を味わう事ができると思われる。実際、武居先生が用いていたスライド内の写真に写る先生方は、どの方も表情がよく生き生きと「楽しそうに」していた。この場がきっかけとなり、研究会に対するマイナスイメージを払拭し、なおかつ充実感も得られればこんなに良い事はない。また人と語り合うことで教師という職業が本来持つ、「人と関わることが出来る楽しさ」を取り戻すきっかけになるかもしれない。

二つ目に関しては、私が所属する至民中の鈴木先生のお話をご紹介したいと思う。鈴木先生は様々な経験や教育観を持つ同僚の顔を思い浮かべながら、楽しい時間にしたい、実りある時間にしたいという一心で研究会をしかけていた事実を、あの日初めて知った。特に同僚の本音や要望に応えるという形で研究会を企画運営されていた。例えば、私も参加したある月の研究会での話。至民中の教頭先生が講師となり、学級経営についての実践を語っていただいたことがあった。実はこれは先生方の中に、学級経営についてもっと知りたい！との声が上がったことがきっかけだったそうだ。このように同じ現場で働

く仲間の「やりたい！」や「知りたい！」といった本音に耳を傾け、ニーズに応えてくれるからこそ、参加する私たちもやる気になる。何より「学びたい」との欲が湧く。それが満たされるゆえ自然と「楽しい」という感情がわいてくる。今回鈴木先生の報告をきいて、私自身毎月の研究会が苦でなかった理由がはっきりした。ラウンドテーブルという場で、自分たちの研究会の概要を聞くなど、そう頻繁にあることではない。私の立場は院生なので同僚と言えるかは分からないが、それでも同じ現場で実践研究を共にしてきた一人として、堂々と発表される先生の姿を拝見できたのは素直に嬉しかった。

以上先生方の発表を簡単にまとめたが、こうして筆を進めているうちに「教師は、人（生徒や同僚）と共に楽しさを求める（べき）仕事」という考えが

生まれた。どんなに辛くても、いや、辛く厳しい職業だからこそ楽しさを追い求め、目指すべきなのかもしれない。しかしこれは一人では難しい。かならず人が居て、その人に本音をぶつける、そのような機会を設ける事で辛さも楽しさを共有する事ができるのではないだろうか。

「生徒は先生の移し鏡である」という言葉がある。今回のラウンドテーブルでもこの言葉を耳にした。本当にその通りである。教師が生徒に与える影響は大きい。良くも悪くも。だからこそ、この言葉を胸に刻み、教師としての役割や仕事を見直す必要があると感じた。その一つが、「楽しさ」。私たちが充実感を求め、楽しそうに人と接すれば、きっと何事もプラスに働くに違いない。

Session 0に参加して

富士市教育委員会（静岡県富士市立高等学校）

指導主事 眺野 大輔

2月28日は、特別な雰囲気少しでも間近で感じようと、9時過ぎには受付を済ませ、整理券を受け取った。座席番号は7番、絶好の場所でアンディー・ハーグリーブス先生の特別講義を聴けることになった。その後、少し会場を離れて興奮を冷まし、開始15分ほど前に再び座席に着いた。会場内はすでに多くの聴衆で埋め尽くされ、これから始まる特別な時間への期待感に満ちていた。同時通訳の機器のチェックが始まった。いよいよだ。

ハーグリーブス先生は、ユーモアに富んだ日本でのエピソードで会場の緊張感を一気にほぐし、iPadで会場を逆撮影する頃には会場は一体感に包まれていた。時折見せるいたずらっぽい笑顔に油断し、心が開いていったのだろう。本題に入る頃には、私を含め会場全体がグッと話に引き込まれていた。ふと我に返り、そんな自分に気付いて冷静になったその頃に、ひとつの単語が飛び込んでくる。“Decisional Capital”，この言葉に引っ掛かる。その後は、話と思うように頭に入らない。それまでの話の中で“Professional Capital”として、“Human Capital”や“Social Capital”の重要性は、自分でも実感できるものだった。しかし“Decisional Capital”、“意思決定”と“資本”は、思っても見ない組み合わせだ

った。こんなことに気を取られているうちに、先生の特別講義は終わった。



その後も、午後のセッション、翌日のラウンドテーブルと、とても充実した時間を過ごしていたのだが、ふと気が付くと“Decisional Capital”について考えていた。しかし、このようにひとつのキーワードへの引っ掛かりが持続すること自体は、とても面白いことだ。何か重要なことを言っている。でも、自分の中にある具体的なイメージと結び付けられない。これまでの自分にはない新たな概念が飛び込んできたということだ。ラウンドテーブル終了後も、このことが頭から離れず、何度も考えては、具体的なイメージにならないまま頭の隅に戻すことを繰り返

返していた。すぐに答えが得られる手応えはなかったが、久しぶりの感覚を楽しんでいた。

そんなとき、1通のメールが届き、ニュースレターでセッション0に参加した感想を書くことになった。そうすると、頭の中で飼っていた“Decisional Capital”を放ってはおけない。何とか自分なりのイメージをはっきりさせたいと、インターネットで先生の講演録やインタビューなどの記事を探してはプリントアウトし、ヒントを探し続けた。

そんなことを続けるうち、頭の中で様々なものがパッと繋がった。「変化が激しく、知識が次々に更新され、価値観も変化し続ける知識社会では、その状況に沿って意思決定できること自体の価値が非常に高いのだ」ということに気付いた瞬間だった。言葉にすると、大したことではない。しかし、私自身の「意思決定」という言葉のイメージが塗り変わった感覚だ。それまでの「意思決定」という言葉の印象は、堅く、マニュアル的で、一部の権限を持った人が行う行為だという感覚だったように思う。これからの知識社会ではそうはいかない。全ての人が誰かに委ねることなく、自らが「意思決定」することが求められる。そう考えれば、やはり、刻々と変化する状況下で、その場に適した「意思決定」ができることは、専門職としての価値を大きく左右する「資本」なのだ。

“Decisional Capital”は、状況の異なる場面での実践を積み重ね、そこで導きだしたエッセンスを、次の実践に活かすサイクルでの「意思決定」の経験として高められていく。さらに、それを専門職のコミュニティにおいて共有し、自分の経験ではない様々な「意思決定」の状況を分析し、自らの実践に活かすことで一層研ぎすまされていく。そこで繰り返される

返される「意思決定」とは、分岐点でいくつかの選択肢から一つを選ぶようなものではなく、次の実践と省察のサイクルをデザインするようなものかもしれない。

この“Decisional Capital”は、専門職だけに求められるものではなく、これからの知識社会における市民としても、欠かせないものになるだろう。このような社会で生きる生徒に対しての教育は、明らかに20世紀のそれとは違う。将来、知識社会の市民となる生徒の学びは、単なる情報や技術を得るだけではなく、専門職が“Decisional Capital”を獲得してきた実践と省察のサイクルに沿ったものでなければならないはずだ。そこでは、これからの社会での成功を左右する「学ぶ能力」を育成することになる。そのとき、専門職として重要な要素である“Decisional Capital”は、彼らの学びをデザインする上で、重要な枠組みを提供することにも繋がっていく。教師は、専門職であり続けるために学び続けることが求められるということだ。

まさに、教師に求められる仕事は変化している。



Zone B 「東アジア型教師像と教師教育の探究

—上海師範大学の研究と実践から学ぶ— 報告

福井大学教職大学院

教授 森 透

今回初めてZone Bの中に、「Session III フォーラム特別企画」として中国の教師教育のセッションを設けることが出来た。今回のフォーラムを準備した関係で、私が全体の報告をし、フォーラムに参加された足羽高校の片桐哲也先生に感想をお願いした。

今回のフォーラムは、「東アジア型教師像と教師教育の探究—上海師範大学の研究と実践から学ぶ—」をテーマとして、2月28日（土）16時から18時までの2時間、コラボレーションホールで開催された。報告者は、①上海師範大学の教師教育の現状と課題（陸建非）、②上海師範大学天華学院の教師教育の

現状と課題（郭偉奇），③上海市教育委員会の取り組み（張進），④首都師範大学の紹介（夏鵬翔），⑤上海師範大学附属第一小学校での美術授業実践（濱口由美・大橋武史）の5本となり，ゲストの佐藤学氏（学習院大学）のコメントもありで2時間では足りなかった。今回のフォーラムが実現した背景として，2013年3月，2014年3月，そして2014年12月の3回，上海師範大学を訪問し交流を深めてきたこと，そして2005年7月に「学術交流に関する協定」を締結し，さらに2014年3月に協定を継続したことがあげられる。今までも教職大学院の教員だけではなく，現職院生や学部卒院生も同伴して訪問してきたが，更に本格的に「教師教育」について深く学術交流を行いたいと考えて，今回のフォーラムが実現したのである。当日の参加者は約20名であったが，林福井県教育長・三田村企画官等の県教委の方々や寺岡副学長，足羽高校の片桐教諭等が参加され，内容的には大変充実したフォーラムとなったことに感謝したい。なお，中国語の通訳は上海師範大学国際処の乔易安氏にお願いした。



①陸建非氏は，1. 世界における教師教育の背景，2. 優秀な教員の訓練計画，3. 本学の教師教育改革の基本状況，の3点についての報告であった。2010年に定めた中国の「国家中長期教育発展・改革計画要綱（2010～2020年）」には，「教育の大計は教員が本である。優れた教員があるからこそいい教育があるのだ」とある。上海師範大学の教師教育のカリキュラム改革としては，①現行の教師教育の公共課程の改革として，子どもの発展と学習，教育基礎及び心理健康と道徳教育という3つの学習領域をめぐって，カリキュラムのモデルをそれぞれ設計していること，②教師教育の技能訓練と教師素養の開拓を強化すること，③学科基礎を強固にすること，④師範教育類の公共基礎課程を調整すること，がある。さらに，教育実習の改革（18週間への延長と実習基地

の建設強化），及び教師陣の質の向上，教育の国際化の推進等の取組みが紹介された。



②郭偉奇氏は，2005年4月に創立された私立大学である上海師範大学天華学院の紹介をされ，工学・管理学・文学・教育学・理学と芸術学の6学問分野と25専攻があること，特に，幼児教育・小学校教育・芸術教育・応用心理学・中国語教育・日本語の専攻が教師教育に関係があると考えられる。さらに，若手教員の訓練に力を入れており，2014年9月までの64人の中層管理職のうち14人が40歳以下で22%を占めていること，若い幹部は各学部の副学部長などを担任し教学管理，行政管理などを兼任して，それぞれの部門の中で中堅となっていることが報告された。さらに，2020年までに50人の専任管理核心チーム，150人の優秀専任教員及び30人ぐらいの目玉職員を養成する計画で，2010年には修士学位を持っている若手教員を35人アメリカのパシフィック大学へ派遣したとのことである。

③張進氏は，上海市教育委員会の紹介をされ，就学前教育，小中義務教育，高校などの初中等教育，大学教育，職業技術教育及び成人教育，上海教育の全般を助言，指導，管轄という任務があるが，上海には直接小中高校を管轄する区県教育局があるため，上海市教育委員会は大学教育の政策指導をメインにしているとのことである。教育制度は基本的に小学校5年，中学校4年，高校3年であり，2004年から全面的に5，4，3制度を上海市範囲で実施するようになった。義務教育は日本と同じ9年間であり，高等教育機関数は国立10校，公立37校，私立21校である。教員研修制度には様々な研修プログラムがあり，自主研修，学校でのグループ研修，教育学院（区レベルの教員研修施設）から師範系大学（華東師範大学，上海師範大学）での研修活動などがある。最後にPISA調査がトップクラスであることで，生徒達と教師達にとって貴重な経験となったことが報告された。

④夏鵬翔氏は北京市にある首都師範大学初等教育

学院の紹介をされた。1954年に創立され1992年に改名、北京市教育委員会に所属、学部（学院）は25、専攻は55、修士課程・博士課程があること。養成目標は「小学校教育事業を愛する。児童生徒を理解し、それを本とする。小学校教育の意義を認識し、教師道徳を先頭とする。教師としての専門性を発展させ、教科を通して人を育て、生涯学習を続ける」とある。教育実習は3年次が5月に4週間（郊外の小学校）、4年次が10月に6週間（市内の小学校）である。

次に、佐藤学氏が感想とコメントを述べられ、最後に⑤濱口由美氏と大橋武史氏が、上海師範大学附属第一小学校で行った美術授業の紹介をされた。それは、2014年12月22－25日に上海を訪問したときに、附属第一小学校で福井大学の美術コースの学生が授業にチャレンジをした報告であった。福井大学附属小学校の教諭である大橋氏が担任をしている附属小の子どもたちの絵画を上海に持参し、それを上海の子どもたちが見て共感・感動して非常に盛り上がった授業となった。学生と子どもたち、また私たちは

「言葉の壁」を超えて、美術の授業は可能であるということの発見があった（詳しくは「ニュースレター第70号」（2015.02.28）を参照のこと）。

以上、時間的に厳しく、報告者6名、及び佐藤氏のコメントという盛りだくさんのフォーラムであったが、これからの上海と福井の学術交流の基礎が出来たのではないかと考えている。



※ご所属は当時のものです。

福井大学基金にもとづく
福井大学教職大学院
次世代教育創成資金

明日の学校をつくる協働の実践と探究を支えるために
明日の教師の学びを支えるために

次世代教育創成資金に
ぜひご協力ください。



詳細はパンフレットにてご確認ください。